

的特徴と、ひとつのヘブライ語オストラコン(一般に「収穫者の書簡」という呼称で知られる)である。前者はこの砦の支配者が誰なのかという問題に関わり、その解釈如何によって、後者の意味するところも変わってくることになる。以下順に検討していく。

まず物質文化について。この場所から発見されたオストラカにはユダ系の名前やフェニキア系の名前が書かれており、ユダ人やフェニキア人の居住が知られる。さらに大量の東ギリシア土器の存在は、ギリシア人の居住を示している。ここが、ギリシア人傭兵を中心とする国際的な人口構成を持つ砦であったことがわかる。しかし、どの国がこの砦を築き支配していたのかは、定かではない。従来は歴代誌下三四章六節(ヨシヤ王がシメオンの領域まで祭儀改革を強制したという内容)の記述に基づき、ユダ王国がこの場所を支配していたと考えられてきたが、近年実はエジプトが実際の支配者であり、ギリシア人傭兵やユダ人傭兵を使役していたという説が有力となっている。その根拠としては、この砦の構造(計画)が、イスラエルのではなく、エジプト的であること、ここから出土する搬入土器の諸特徴(キプロスのオフイオライトで作られたものや、ナイルの粘土で作られたものの存在)などがある。

この仮説を前提すると、有名な「収穫者の書簡」の解釈にも重大な影響を与える。従来この「書簡」は、ユダ支配下にあるメツアド・ハシャブヤフ近くで農作業をしていたユダ人労働者が、ユダの役人ひいては王に、法(申命記二四章一二―一三節・一七節および出エジプト記二二章二六―二七節参照)に基

づいた上着の返還を訴えているものと解されてきた。しかし、この砦の真の支配者がエジプトであるとすれば、エジプト支配下の砦に、属王としてのユダ王が、物資を供給する義務を負っていたということになる。そうだとすれば、ユダ人の「収穫者」は、属王としてのユダ王に対して賦役労働を行っていたことになる。古代近東においては、征服者が被征服者の法を(彼らの事柄に関する限り)受容する慣習が存在したのである。さらに考古学的データを援用すれば、この「書簡」の文学類型は従来、訴状あるいは超法規的嘆願書と考えられてきたが、当該オストラコンの外的・内的特徴(書記が書いたと思われる文字と、それにそぐわないぎこちない文体など)から、「訴状の下書き」あるいは「訴状作成のためのメモ」であるということがいえるであろう。

メツアド・ハシャブヤフの物質文化の諸特徴は、この砦をエジプトが支配していた高い蓋然性を示している。そして、そこから出土した有名なオストラコンは、エジプト支配とも矛盾なく読むことが可能である。いわゆる「ヨシヤの改革」と呼ばれる出来事について、聖書外資料すなわち考古資料を第一、聖書資料を第二として再構成するとき、聖書資料を一次資料として再構成する場合とは、異なる図が浮かび上がってくるのである。

幻視と夢の図像学

本発表は、中世ヨーロッパの幻視や夢について、それらの図像表現を用いながら神あるいは絶対者、超越者とのコンタクト

細田あや子

という観点に注目しつつ考察するものである。夢や幻視は宗教的な告知、知らせの媒体である。これらを通して神・超越者がメッセージを伝える。その神や超越者の顕現は現実世界への異界の現出となる。幻視や夢の図像学的特徴を明らかにしながら、これらの現象に当時の人びとはどのように向き合っていたのか、それらをどのようにとらえていたのか、また、人びとはどのように不可視なるものをイメージしていたのかを考えてゆく。

幻視や夢の図像学的分析を進めるにあたり、①幻視者(夢見手)と幻視(夢)の内容があわせて描出されているもの、②幻視者のみが描出されているもの、③幻視のみが描出されているもの、と大きく三通りのタイプに分類することが可能である。

①の図例としては、幻視者(夢見手)と幻視(夢)の内容の配置や位置関係に注目する必要がある。異なる次元がどのように描出されているか、また時間の経過やこれから起こりうる将来の出来事がどのように表象されているか、幻視者の体験や変容過程はどのように読み取れるのか、といった点に関して複雑な構図をもつ作例も見いだされる。

②の作例としては、ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの幻視者として描かれている写本挿絵があげられる。それらは、聖霊に満たされ、天使の言葉を受け取りつつ執筆中の預言者や福音書記者像、あるいは教皇グレゴリウス一世が聖霊のインスピレーションを受けて口述もしくは著述をしている場面など著者像の画像と共通点が認められる。また黙示録のヨハネの描写もこの著者像タイプのものが多い。

③の作例も、ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの著作『スキヴィアス』写本における幻視内容のみの描写が指摘できる。

以上の三つの図像タイプに分けて幻視や夢の図像学を考察すると、異なる次元を表現するためにさまざまな工夫が施されることがわかる。たとえば天使の出現、雲や光線による場の仕切り、太陽や星など天体の(異変を示す)描写による超自然現象の表現、神の手を通して神の存在そのものを示す手法などである。梯子や階段、そして山や道、窓やドアなども天と地、異界とこの世とを結ぶルートとして重要である。

また幻視の内容だけか、幻視者もあわせて描出されているか否かといった違いが、その画像内容の理解を左右することもある。さらに人間(夢、幻視を受け取る人間)と超越者との関係もきわめて巧妙にかつ多様に描出されうる。天使が幻視者(夢見手)と幻視(夢)内容とを結合する場合があるように、幻視や夢では、異次元なるもの、この世ならざるものとのコミュニケーションが決定的な意味を持つ。

図像学的考察をとおし、イメージとヴィジョンとの相互関係が密接なことも指摘できる。またイメージのなかのイメージとといった、表象による連鎖で作り上げられる入れ子構造のような想起・記憶の働きも注目すべきである。幻視や夢、さらにそれらの造形について考えることは、イメージ、想像力(イマジネーション)へと視線を向けることとなるが、可視的画像をみて連想が働きまた心に記憶されることによってできあがるイメージの複雑な構造、想像力が、宗教美術においても機能していることが明らかとなる。